

自分が決めた働き方

～6次産業化に関わる女性～

全国で農林漁業の6次産業化※を推進する動きがある。従来、男性主導で行われてきた農業であるが、6次産業化することで、より視野の広い農業経営が期待されるとともに、生活者・消費者目線のある女性の働き方も期待されている。

松永如美さん家族は、父、母、兄・如実さんの4人で静岡市清水区由比の急傾斜の土地で家族で農業を営んでいる。150年続く農家で、みかんをはじめとした農作物を栽培している。現在は、農産物の加工・販売を行う傍ら、父・信彦さん（60歳）と如美さん（32歳）は狩猟も行う。

信彦さん・如美さん親子に、家族経営の農業のこと、女性が農業や狩猟に関わることについて聞いた。そこから、女性の農業分野での働き方や活躍について考えてみたい。



松永 如美さん

農業に関わろう！



松永農園では、信彦さんの先代から低農薬で農作物を栽培してきた。しかし、母の敬子さんが農薬散布で体調を崩したことをきっかけに、使うのが当たり前とされていた農薬と化学肥料の使用をやめた。その代わりに、害虫を取り除くため、天敵となる虫を探して畑に放したり、地域の天然林を活かし天敵の虫が常駐できる環境を作ったりして、無農薬での農業経営を行っている。

由比という土地柄、急傾斜の限られた土地で、作業を効率良く行い、かつ、その手間に見合う値段に反映できるのは、果樹以外にない。地域の農協では、安定した供給量・ブランドを確保するために、柑橘類は青島みかんのみを出荷するよう農家に求めた。しかし、松永さんの畑のある場所は日照時間が短く、青島みかんを栽培しても他に比べて甘みが足りないみかんしか育たない。そのため、土地に合った他の果物を栽培し、農協は介さず、イベントなどで、直接自分たちで販売し利益を確保する方法を模索しなければならなかった。当然、果物だけではバリエーションが少なかったため、敬子さんが中心となり加工品を作り、より多くの商品を販売できるようにした。

そのように働く両親の姿を見て育った如美さんにとって、農業は、楽しく働くことができる仕事だと子ども心に感じる事ができた職業だった。幼い頃、一緒に過ごした畑は遊び場であり、手伝いをするのは、

ごく自然の流れであった。

農業に慣れ親しんできた如美さんだったが、兄がいるため家を継ぐ立場ではなかった。そのため、あまり乗り気ではなかったものの、人に誘われて仕事に就いた。しかし、人間関係でストレスを感じる事が多く、自ら選んだ仕事でなかったこともあり、その仕事をずっと続けていく気持ちはなかった。

その間、近隣の農家は高齢化が進んでいた。次の担い手がおらず、手入れができなくなった畑の借り手を探していた。最低限でも畑の手入れをしないと野生動物によって畑は荒らされてしまう。松永さんの畑にも野生動物の害が及ぶことが懸念された。この時点で、土地を借りてまで農業が継続できるのは、地域で一番の若手農家、松永さん以外いなかった。信彦さんは畑を借り、規模を拡大する決断をしたが、規模を拡大したことによって、今までの畑に手が回らなくなるといふ事態に陥ってしまった。そんな状態を見かねた如美さんは、迷うことなく仕事を辞め、家族と一緒に農業をすることに決めた。

狩猟免許を取得、野生動物と向き合う



農家の減少・高齢化、耕作面積の減少などにより野生動物による農作物の被害は、近年増加傾向にある。由比の地域では、シカが増え、畑が荒らされている。電気柵で自衛をしても壊されることがある。個人で駆除業者を頼むのも、電気柵を設置する

のも費用がかさむ。だからこそ、野生動物から作物を守るための狩猟は必須となる。

これまで信彦さんは、義父と共に猟をしていた。如美さんは、子どもの頃からイノシシなどをさばく父親の姿を見て育ったため、猟をすることの恐怖感や抵抗感はなかった。狩猟ができる人の高齢化が進み、技術を教えてもらう機会は年々減っている。如美さんは、教えてくれる人がいるうちに狩猟の免許を取りたいと思うようになった。信彦さんは「やる気がすべての原動力」と考えており、「若い人でも、男でも女でも、覚える気がある人には誰にでも教える」と言う。

その後、如美さんは試験を受け狩猟免許を取得した。猟銃を扱うためには、銃具の管理費、保険の費用などが掛るほかに、射撃の腕を磨くために定期的に練習することにも必要とされる。如美さんは「仕事の合間に釣りに行く感覚です。好きで行っていることは苦になりません」と言う。信彦さんも「(費用や手間がかかるので) 道楽と思わなければやってもらえません」。

近隣の畑で野生動物が出て、困っている



父・信彦さんと愛犬ダイと一緒に

という話があれば、いつか自分たちの畑を荒らしに来るかもしれない。そのため、依頼があればボランティアとして野生動物の駆除を行っている。

農家のワーク・ライフ・バランス



「基本、仕事に休みはありません。ブラック企業ですよ」と笑う如美さん。信彦さんも若い頃、先代に掛け合い週に1回の休みを実現させたことがある。しかし、作物の生育に迫られ、自らその後の埋め合わせをしなければならず、休んでも休んだ気にならなかった経験がある。そのため、松永農園では休みは決めていない。休みが欲しい時は事前に申告して休むことができる仕組みだ。「自分のペースで休暇を取ることができ、都合に合わせて働くことができるので自由度が高いんです」と如美さんは言うが、好きで行っている仕事のため休みの希望もあまりない。

外で働いたことのある如美さんは、会社勤めの方が現金収入が得られると感じることもある。しかし、収入が高くて、それ以上にストレスを感じるのであれば、望む働き方ではないと言う。

今後、農業を続けるために



如美さんの同級生の中で、農家に生まれながらも農家を継ぐ人はほとんどいない。



親世代としては、子どもへ家業を継がせるには経済的に不安があり、継がせられないと考えている農家が多い。結果として農家が少なくなってしまうのは仕方

がない、と如美さんは考えている。信彦さんは、会社勤めの後、定年で戻ってくる同年代の農家の後継ぎを「今風の農業」と捉えている。

高齢となった近隣農家は昔からの知り合いであり、若い時から世話になった人も多い。時々、自分たちの仕事の時間を割いて、草刈りや収穫の手伝いに行く。近隣農家が廃業してしまうことで、畑が荒れ、野生動物も増えてしまうからだ。如美さんは、少し手伝うことで、近隣の農家が少しでも長く農業を続けてくれることを望んでいる。信彦さんは、頼られることで自分たち自身も働くことへのモチベーションを上げることにもなると考えている。

如美さんは採れた果物から、かき氷シロップを作って販売している。青い花のハーブを使い、青いかき氷シロップを試作し商品化した。また、信彦さんと相談して機材を購入し、果物をドライフルーツ(写真右)にして商品化を試みている。同じ機材で、自ら狩ったジビエを犬用のジャーキー作りに利用できないかと試作も重ねている。アイデア次第で、作りたいものを作り、商品とし

て販売できる今の環境を楽しんでおり、今後も、自分にしか作れないオリジナルのものを作っていききたいと意欲を燃やす。

※1次産業としての農林漁業と、2次産業としての製造業、3次産業としての小売業等の事業との総合的かつ一体的な推進を図り、農山漁村の豊かな地域資源を活用した新たな付加価値を生み出す取組。これにより農山漁村の所得の向上や雇用の確保を目指している(農林水産省HPより)。

あとがき

今回取材をするにあたり、情報収集する中で、「農業女子」「狩りガール」という、聞こえの良い言葉が多く見られた。社会にはまだまだジェンダーによる偏見が多い。農業や狩りは男性が中心で、女性性がそこに関わるとマイノリティの扱いをされる。しかし、「やる気が全ての原動力」と言う信彦さんの言葉から、性別役割分業に囚われることなく働くことができる環境があり、自分自身がどう関わっていきたいかを選択してきた如美さん。力強いイメージの狩猟と、繊細なイメージの商品開発。どちらも如美さんのありのままの働き方であり、好きな仕事の中でだからこそたどり着いた働き方なのだろう。狩ったものを活かし、消費者の声に耳を傾ける姿勢は農業の6次産業化においても、重要なことだろう。

また、顕在化しつつある農家の高齢化問題、後継者不足の問題。自分たちのできる範囲で、地域のために労働力を提供している如美さんたちのような存在がいることを心に留めておきたい。(其田育子)

夢を仕事にするために

多くの力に支えられて

「あなたは、大人になったら、何になりたいですか?」と、誰もが問われたことがあるだろう。私たちは、子どもの頃の夢を持ち続け、実現することができているだろうか。子どもの頃持った「ゴリラに会いたい」という夢を、仕事として実現した安藤智恵子さん。周囲の協力や助言に助けられながら、夢を実現してきた安藤さんに、その秘訣と、これからについて話を聞いた。



安藤 智恵子さん
一般社団法人エコロジック
国際協力マネージャー

動物への思いを、かたちにする

安藤さんは、子どもの頃から動物が大好き。高校生の時に流行した漫画を見て、動物を助けることができる獣医に憧れた。同じ頃たまたま観た映画「愛は霧のかたじけなく」。人間とゴリラにコミュニケーションが成立することに感動し「ゴリラに会ってみたい!」という夢を持つことになった。

安藤さんは3姉妹の次女として生まれた。進学希望だった私立大学の獣医学部は学費が高く、獣医学科のある国立大学を目指すことにしたが、当時の人気漫画の影響で倍率が高くなっていた。獣医になることを諦め、

自分の能力を生かせる道が他にもあるかもしれないと思い直し、地元の大学へ進学した。

しかし、どうしても動物への思いを諦められなかった。両親の大反対を押し切つて、大学を2年で退学し、再び獣医師を目指し勉強を始めた。その時に、野生動物の研究ができる研究室があることを知った。「いつか野生のゴリラ研究をしたい」と考えていた安藤さんは、3年間の自宅浪人を経て、23歳の時に、野生動物の研究ができる北海道の畜産大学へ再入学を果たした。「夢を叶えるために、意地もあったかもしれない」と安藤さんは語る。

学生寮に入り、自由な校風や理解ある友人たちに囲まれたのびのび過ごし、それまでの人生で一番自分らしく振舞うことができた。学業に加え、エゾシカの研究とアルバイトをしながらの学生生活だったが、まったく苦にならなかった。奨学金制度を利用して、さらに大学院に進んだ。

大学院2年の時、博物館への就職が内定していたが、同時にJICA(ジャイカ)の青年海外協力隊の試験にも合格。アフリ

カの野生動物への憧れと、ゴリラに少しでも近づきたい気持ちを秘めつつ、アフリカ行きを選択した。

派遣先は東アフリカのサバナ地帯にあるマラウイの国立公園で、野生動物保護官として生態調査や報告書を作成するのが任務だ。マラウイの人たちはとても温厚でやさしく、初めてのアフリカ生活で慣れない安藤さんを、いろんな面でサポートしてくれた。任期は2年だったが、現地の人や野生動物に囲まれ充実した日々をもっと過ごしたいと、もう1年活動を延長した。

多くの野生動物に接しながらも、まだ会えていないアフリカ大陸中央帯の、熱帯雨林に生息するゴリラに思いを馳せた。「やっぱりゴリラの研究をしたい!」という気持ちがいよいよ強くなっていった。

ゴリラに会うために、行動する

協力隊の任務が終わったら、日本のゴリラ研究の第一人者で、当時京都大学助教授だった山極壽一さんに、ゴリラに関わる仕事について相談に行こうと決めていた。その時の安藤さんは30歳を過ぎていた。自分一人で悩んでいても先には進めない。山極さんは快く会ってくれ、ゴリラに関わる様々な道について説明してくれた。「あの時、面識もない私を受け入れてくれなかったら、今の私はなかった」と安藤さんは言う。

一旦、学生時代を過ごした北海道へ戻り、野生動物の生態調査をする会社で働きながら、ゴリラに関わる方法を模索することに

した。

2年後、思いがけず山極さんから「アフリカのガボンでゴリラの長期調査があるの」で、安藤さん、行ってくれませんか?」と連絡が。二つ返事で依頼を引き受けた。安藤さんのこれまでの行動が実を結び、チャンスをつかんだ瞬間だった。

そうして、2003年から京都大学に所属し教務補佐として、アフリカでのゴリラ研究に携わるようになった。森を良く知るガボンの人たちと森を歩き、山極さんや日本人研究者の助言もあり、ゴリラ研究に成果が出せた。安藤さんのガボンでの研究活動は12年にも及んだ。

ゴリラへの思いを仕事につなげた安藤さんは、「自分の夢を本気で伝えることで、周囲の人たちが助言や必要な情報をくれた」という。「特に初めての地では専門家である現地の人の話を聞くことや、自分にできないことは、できる人を探し協力してもらったことが、夢を仕事に繋げる第一歩だ」と教えてくれた。

コミュニティが、子どもを育てる

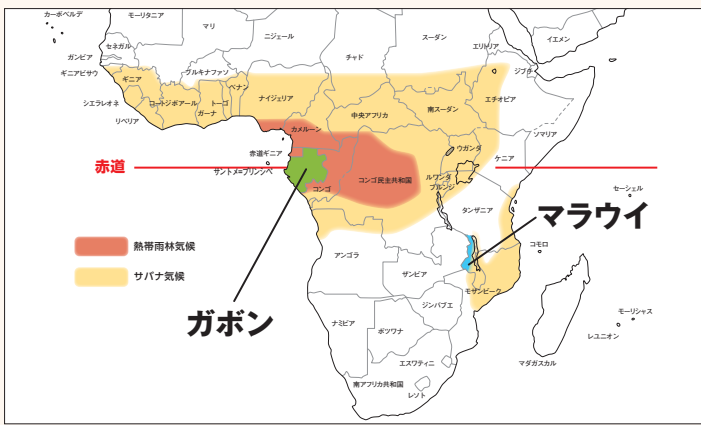
現在、一児を育てる未婚のシングルマザーである安藤さん。アフリカ滞在当時は、コンゴ人パートナーがいた。40歳で妊娠した時は、高齢出産のタイムリミットが近かった。「どんな状況でも、もし子どもができたなら産もうと決めていました」と笑顔で語る。

高齢出産だったため、万が一のことを考慮し、秋田市の実家に帰り出産した。安藤さんの決意を理解したのか、反対していた母親は

全面的に補佐してくれた。所属先の京都大学の産休育休制度も利用することができた。

その頃ガボンでは、野生生物保全とエコツーリズム開発を目的とするSATREPS事業※1が実施され、山極さんからこの事業に参加してほしいことを伝えられた。アフリカでの子育てを勧められ、8か月の乳児を連れて、再びアフリカへ渡った。

ガボンでは「子育てに多くの人たちが協力してくれた」と語る。これまでのゴリラの仕事を通じ、安藤さんとガボンの住民との間には、時間をかけて築いた信頼関係があった。それが育児と仕事の両立を可能にしたのだ。その環境で、もまれながらも健やかに育った息子には、現在12歳になった。



アフリカのマウライとガボン

帰国後の現在は富士宮市で暮らす。10年前に父親が亡くなり、秋田市から母親を呼び寄せ、息子と3人で暮らしている。「自分一人の時は、何も考えず好きなことをしていたが、今は守るべき人がいるので、責任をもって生きたい」という安藤さん。ワーク・ライフ・バランスの「ライフ」である今後の生活は、息子の成長や母の介護の心配など、周囲の様子を見ながら柔軟に対応したいと考えている。

持続的（サステイナブル）に、活動する

現在、安藤さんが所属する一般社団法人エコロジック※2は、富士宮市を拠点に、世界各国でエコツーリズムの開発支援を行っている。地域の自然や伝統文化を保護しながら、地域住民は経済的恩恵も得ることができる、持続的（サステイナブル）な観光の形であるエコツーリズムを推進している。

安藤さんは、当時SATREPS事業の専門家としてガボンに来ていたエコロジック代表理事の新谷雅徳さんから、「ガボンのプロジェクトを継続しながら、富士宮でエコツーリズムを学びませんか」と声を掛けられた。それがきっかけで、エコロジックのスタッフに転身した。

富士宮市では、地域住民と協力して、インバウンド向けのエコツアーを開発。この経験をガボンのエコツーリズム開発にも活かすため、ガボンから研修員を招き研修を実施した。

ゴリラに会うという夢の実現のため、20

代の頃は遠回りをしたと感じている安藤さん。「あなたがやってきたことは、何ひとつ無駄なことはない」と言ってくれた先輩の一言に救われた。そして50代になった今もお、ゴリラに関わり続けたい夢を、形にする途上にある。

現在、2021年JICAの草の根技術協力事業のプロジェクトで、ガボンのエコツーリズム開発事業※3が始動している。「世界のの人たちにゴリラだけでなく、ゴリラを取り巻く環境や、住民たちの文化や生活にも興味を持ってほしい。そして、野生ゴリラが次世代も変わりなく存在できるよう

あとがき

子どもの頃の夢を実現させた安藤さんに「自分の人生だからこそ、自分の意思を実現させるために生きる」が大切だと学びました。周囲の期待に沿って本意に生きるのではなく、思いを実現させてきた行動力に驚かされました。様々なサポート資源を活用し、周囲の協力や助言に助けられている姿から、積極的に行動することで夢に近づき、理解や共感を呼び、支え合いにつながっていくのだと感じました。アフリカでの活動を知り、自然や動物たち生命との共存共生のあり方を、改めて考えました。安藤さんの育児からも、仕事との両立には、職場や地域での協力や信頼関係が必要であることがわかります。最近では晩産化によって、育児と介護のダブルケアが問題となり、特にひとり親家庭が、気軽に相談でき、利用できる支援サービスの拡充が、緊要だと感じました。

様々な理由から、自分のやりたかった仕事を断念、中断した人たちが、再びチャレンジして活躍するためにも、老若男女の誰もが活躍できる「働き方改革」の促進が重要です。その人の時々で変化する、ライフスタイルやライフステージに合わせ、柔軟に働き方を選択でき、それを支える制度の充実が望まれます。そして、私たち一人ひとりが、積極的に行動することが、自分の希望するワーク・ライフ・バランスの実現につながります。

子どもの時に思い描いた夢を、誰もが諦めることなく、実現できる社会にするために、そして、誰もが生きやすい社会を、次世代へ継承するためにも、行動を起こしていきたいと思います。

（望月富美代）

※脚注 1 国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）と国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）、独立行政法人国際協力機構（JICA）が共同で実施している開発途上国の研究者が共同で研究を行う3～5年間の研究プログラム。

<https://www.jst.go.jp/global/about.html> 参照

2 ホームページ <https://ecologic.or.jp/> 参照

3 2020年エコロジックが提案した西アフリカ、ガボンでの「国立公園を対象とした持続可能な地域参加型エコツーリズム（CBET）普及啓発と開発支援」5年間の事業計画が、草の根技術協力事業としてジャイカより委託される。

<https://www.jica.go.jp/> 参照

という選択

津市、以下、サツマ電機(株)は、今年で創業53年
締役社長の梶川久美子さんに話を聞きました。日本に
(2021年)では、特に「経済」分野における男女格差
就任」に注目が集まっています。父と娘、親子二世代
されている今こそ、検討すべきポイントになりそうです。

「女性経営者」だった祖母

サツマ電機(株)は、1970年、兄弟会
社であるサツマ工業株式会社(川崎市、以
下、サツマ工業(株))より独立して創業しま
した。サツマ電機(株)の創業直後、サツマ工
業(株)では、急死した弘二さんの父親に代わっ
て、専務だった母親が女性社長として会社
を経営するようになりました。当時はまだ
「女性経営者」が珍しかった時代。

他社に先駆けて活躍する「女性経営者」
の姿は、間近で見えていた弘二さんやサツマ電
機(株)の社員たちにとって非常に印象的だっ
たそうです。「私自身も母親を見て、女性
ならではの優しさや物腰の柔らかさが会社

経営に良く作用していると感じていました。
和を重んじていましたね」(弘二さん)

父から娘へ 代替わり

大学卒業後、スポーツアパレル会社での
商品企画担当やキャリアコンサルタントとし
ても働いていた久美子さんが、サツマ電機
(株)に入社したのは2013年のこと。専
務として入社後、2016年に代表取締
役社長に就任し、現在に至ります。

社長就任後は、それまでほとんどなかつ
た社員研修の回数を1年に2回に増やし
ました。今では毎月、人文学の雑誌をテキ
ストに用いて社員同士でその感想文を読み
合い、お互いの良いところを褒め合うなど、
技術教育だけでなく、社員同士のコミュニ

ケーションスキルや人間性を高めるための長
期的な「共育」にも取り組んでいます。

「劇的にはないですが、社員の中には、
会社の雰囲気が変わりましたね、と言っ
てくれる人もいます」と久美子さん。「自分
が社長だった時と比べて」教育には時間を
割いていますね。僕の場合は仕事優先にして
しまっていたけれど(娘は)そこを割り切っ
てやっています。社員に対しては役割分業
をはっきりさせていますね」と弘二さんも言
います。

弘二さんから久美子さんへ、代替わりに際
しての社員の反応はどうだったのでしょうか。
「多少は女性経営者に対する偏見がある
のかな、と思っていたのですが、想像してい
たよりも何もなく、というのが素直な
ところです。父も昔から、男女を偏見なく
フラットな目で見る人でした。そして、私

代表取締役社長の梶川久美子さん

が想像するには祖母が女性経営
者だったので、現古参の社員たち
は若い時に女性経営者の姿が当
たり前にありました。それに続
く社員たちも経営者としての祖
母の姿を見えています。ですから、
私が経営者になっても自然に受
け入れてくれたのかな、と思いま
す。きつと今の若い社員たちも、
経営者や上司の性別は気にしな
いと思います。会社のトップや経
営陣に女性がいることが社員の
意識を自然と変えていくのかもし
れないですね」と久美子さん。

「女性」が働くということ

「私は女子中・女子高・女子大出身で、
就職するときに大学の先生に『君たちは就
職してもお嫁さん候補だから、仕事なんて
期待されていないんだよ』、と言われていた
んです。今考えればとても失礼なことです
よね。でも、当時は何の疑問も抱いていな
かったですね」と久美子さん。社会に出て
周囲の女性たちと話す中で、自分の中では
当たり前だと思っていたことが、実はジェン
ダーのアンコンシャスバイアスにまみれていた
のだと気付きました。

また、社長として取材を受けると、当た
り前なこととして、女性であるがゆえに仕
事とプライベートがセツトになって、両立の
方法を聞かれることもあるそうです。「私は
シングルですが、こうした取材の時もオープ
ンに言うので、逆に記者の方が引いてしま
う、なんてこともあります(笑)。私の周り
には、育児をしながら会社経営をしている
経営者仲間も多く、みんなどうやってバラ
ンスを取っているのか、というのは気になる
点だと思います。今後は女性経営者同士の
対話の場づくりができると思うといいと思っ
ています」(久美子さん)

男性「辺倒」ではない 後継者の選択

久美子さんは「静岡県女性経営者団体
A・NE・GO」の二員として、社内にとど

後継者不足を打破！ 「女性が継ぐ」

産業用ブレーキを製造するサツマ電機株式会社（沼目）。2代目で会長の梶川弘一さんと、その娘で代表取締役のジェンダーギャップ指数（世界経済フォーラム、が大きく、是正のための案の一つとして「女性の社長で繋ぐ会社経営」という選択肢も後継者不足が取り沙汰



会長の梶川弘一さん

る仕事をやれば良いと思っ
て、男性／女性という冠詞が
付かなくなることが当たり前
になると思います。ただ、
私や父が語ることで、娘や女性に
事業を継がせようと思える人が
増えるのであれば、結果としてそ
れが世の中の意識が変わること
に繋がると思います。それが今の私
たちの役割だと思っていますし、
もう男性とか女性とか言っている
場合じゃないよね！という思いで
やっています」（久美子さん）

敢えて「女性経営者」である
ことを強調するのは、世の中の意

識を変えたいという思いがあるから。いずれ
は性別ではなく一人の「経営者」として、カ
テゴリー化される社会を目標としています。

静岡県女性経営者団体 A・NE・GO

県内企業の女性経営者や事業承継予定者ら
8人で2020年3月に発足（現9人）。女性
活躍があたりまえの持続可能な未来を目指し
て、次世代経営者の頼りになる「アネゴ」として、
各種セミナーや講演の企画開催や随時相談を受
け付けている。

まらず、静岡県全体に「女性経営者」の輪
を広げるために活動しています。製造業の盛
んな静岡県では、県内に本社を置く企業の
うち、女性が社長（代表）を務めているのは、
全体の6.7%で、全国第41位※と低い水準で
す。「女性経営者」が増えて「女性経営者」
が当たり前の世の中を作っていくことが、静
岡県内に限らず日本全体で、男女共同参画
の意識が社会に根付くことにつながる、と
久美子さんは考えています。既存の男性経
営者にも後継者の選択肢が増えるというメ
リットがあることが大切だと言います。

弘一さん・久美子さんの周囲から「事業承継をするにも」うちには息子がいないから……という声が上がることがあるそうです。「『いやいや、娘さんがいるじゃないですか！』と言います」と久美子さん。「同業者の中にも後継者に悩む人は多いです。

性別は関係ない！

「私としては女性である前に人間なので」と久美子さんは言います。「経営に限らずなんでもそうですが、能力のある人が向いてい

あとがき

全国「女性社長」分析調査（2021年、帝国データバンク実施）によれば、女性社長の割合は全体の8.1%。都道府県別で最も割合の大きい沖縄県でも11.4%にとどまっています。経営者に限らず、「女医」「女芸人」「女子アナ」「女優」など職業において「女性」であることを強調するような呼称が未だに多く存在していますが、梶川さん親子の取材を通じて、こうした呼称が徐々に影を潜めて、「経営者」「医者」「芸人」「アナウンサー」「俳優」と言うことが当たり前になっていくと感じました。

筆者は、今大学3年生。就職活動が本格化するこの時期、企業説明会等に参加すると、「フレックスタイムの導入で」「女性でも」「働きやすい職場」や「男性でも」「育休取得率が高い職場」が企業の謳い文句になっているように感じます。大学卒業後の将来を見据えるにあたって、「女性である前に人間なので」という久美子さんの言葉どおり、「女性でも」「男性でも」ではなく「私だから」できること、職業も働き方も性別にとらわれない「目」を大事にしたいと思います。

（森朱里）